

【5-1】

公的集合住宅団地におけるコミュニティ形成を目的としたものづくりワークショップの可能性

正会員 ○ 藪谷 祐介*
正会員 山田 信博**
正会員 林 匡宏***

コミュニティ ワークショップ 地域活動
交流 リノベーション 団地

1. 研究の背景と目的

昭和 30 年代より大量供給された公的集合住宅団地（以下、団地）では、空き室の増加、居住者の高齢化に伴い、コミュニティの衰退といった課題を抱えている。自治会等を中心に様々な地域活動に取り組んでいる団地も見られるが、参加者や運営者が高齢化かつ固定化し、団地居住者が持続的なコミュニティを形成するという点において課題も多い。今後は多様な人が参加しやすい、あるいはこれまでに参加していなかった団地居住者が参加できるようなコミュニティ形成のためのプログラム開発が必要である。

近年、若者を中心に DIY 文化が定着し始めている。例えば、UR 都市機構（以下、UR）では、団地居住者に賃貸住宅のセルフリノベーションを認め、現状復帰義務を免除する「DIY 賃貸」という制度を運用し、若者の団地居住を促進させている。そこで筆者らは、こうしたものづくりが若者を中心とした新たな層の参加を促せる可能性に着目し、団地居住者のコミュニティ形成に有効なプログラムとなり得ると仮説を立てた。本研究はその基礎研究として、団地においてものづくりを誰もが参加可能なワークショップ形式で実施することで、コミュニティ形成にどのような影響を与えるか、その可能性を検討することを目的とする。

2. 研究対象地

本研究では、札幌市南区にある UR あげぼの団地を対象とする（図 1）。この団地は 1963～1967 年に日本住宅公団によって開発された RC5 階建ての集合住宅団地で、棟数が 32 棟、住宅戸数が 1240 戸である。また、高齢化率は 49.4%、空き家数は 397 戸（空き家率 32.0%）である。

3. 調査方法

筆者らは UR あげぼの団地のオリジナル木箱「あげぼこ」（W324×D348×H324）を開発した。これは道南杉を活用し、今後の団地内のイベント等でテーブル、椅子、本棚として使用するものである（写真 1）。本研究では、学生の協力のもと、「あげぼこ」をつくるワークショップを開催し、その参加者を対象としたアンケート調査をワークショップ終了後に実施した。アンケートの調査項目は、属性、日常の交流頻度や地域活動への参加に関するもの、ワークショップへの参加に関するものとした（表 1）。

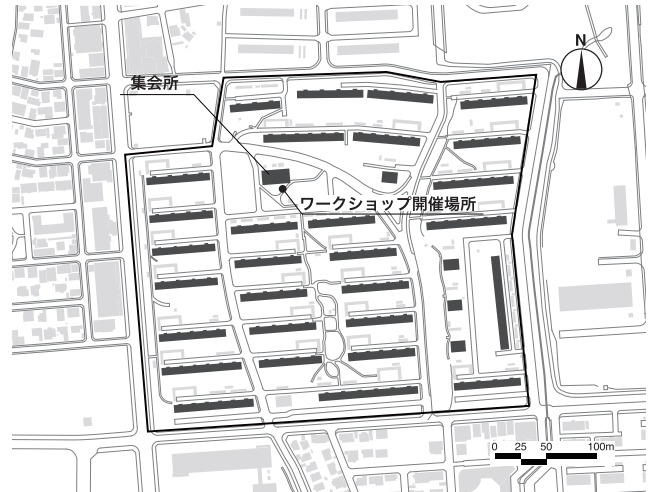


図 1 あげぼの団地配置図



写真 1 椅子や本棚として使う「あげぼこ」

表 1 アンケート調査項目

アンケート項目	
属性	年代、性別、職業、居住年数、同居の家族人数、家族構成
日常の交流頻度・地域活動への参加	団地住民との交流頻度、地域活動への参加状況、今後の参加意向
ワークショップへの参加	参加理由（記述式）、満足度、他の団地居住者との話す機会の有無 共同作業の機会の有無、知り合う機会の有無 今後の参加意向・その理由（記述式）、気づいたこと・感想（記述式）

4. ワークショップの概要

ワークショップは 2018 年 9 月 29 日（土）、30 日（日）に開催された実証実験「あげぼのテラス」（筆者ら主催）の一部として実施した（図 2）（写真 2）。「あげぼのテラス」は、集会所とその周辺のオープンスペースを活用し、開かれたコミュニティ活動のプログラム開発と担い手育

成を目的に実施したものである。開催時間は両日とも10:00-16:00の6時間、天候は29日が晴れ、30日が曇時々雨であった。告知は団地の全住戸に対してチラシをポスティングし、SNSでも発信した。

ワークショップでは予めカットした木材を用意し、札幌市立大学デザイン学部の学生の指導のもと、ビスとインパクトを用いて組み立てるという内容である(写真3)。ワークショップスペースには大風呂敷を敷いてテントを張った。1箱制作するのにだいたい20~30分程度の作業時間を要した。また完成した木箱は、「あけぼのテラス」においてテーブル、椅子、本棚、ディスプレイ棚として活用した。つまり、会場には制作された木箱が増えていくという仕組みである。これにより、参加者はどのように「あけぼこ」が使われていくのかイメージが可能となった。

「あけぼのテラス」への参加者は、29日が50名、30日が59名、両日合わせると109名であった。今回は団地外には積極的に告知をしなかったが、団地内に住んでいる家族から情報を得て参加した方も見られた。そのうちワークショップの参加者は29日が7名、30日が9名、両日合わせると16名であった。1人で複数の箱をつくる参加者もいた。また、参加者が誰もいない時間帯は、学生が木箱を作り続けることで、常に制作風景が見られた。インパクトを持参してくれた団地居住者がいた。

5. アンケートの結果

アンケートは12名(回収率75.0%)の回答を得た。以下にその結果を示す。

5-1. 属性

属性については表2にまとめた。年代について、最も多かったのは「50~59歳」の3名(25.0%)であったが、「29歳以下」から「80歳以上」の参加が見られ、多様な年齢層が参加した。性別については、「男性」、「女性」とともに6名(50.0%)ずつであった。職業については、「会社員」が3名(25.0%)で最も多く、続いて「主婦」、「パート・アルバイト」、「その他」が2名(16.7%)ずつであった(図5)。居住年数は「無回答」(4名、33.3%)を除くと、「5年未満」が3名(25.0%)と最も多かった。

同居の家族人数(回答者含む)は、「2人」が5名(41.7%)と最も多く、続いて「1人」が3名(25.0%)であった。また、同居の家族構成は「単身」「夫婦のみ」「無回答」がそれぞれ3名(25.0%)で最も多かった。

5-2. 日常の交流頻度・地域活動への参加

団地住民との交流(挨拶や会話等)頻度について、最も多かったのは「ほぼ毎日」の4名(33.3%)、続いて「ほとんどなし」の3名(25.0%)、「週に2、3回」の2名(16.7%)であった(図3)。

地域活動への参加状況について、「主なメンバーとして企画や運営に携わっている」が1名(8.3%)、「参加している」が7名(58.3%)、「参加したことがない」は

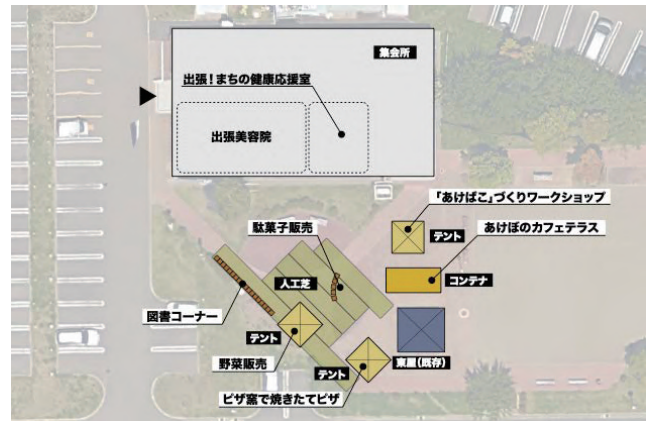


図2 「あけぼのテラス」の会場構成



写真2 「あけぼのテラス」の様子



写真3 「あけぼこ」をつくるワークショップ

表2 属性

属性	回答項目	n	%	属性	回答項目	n	%
年齢	29歳以下	1	8.3%	居住年数	5年未満	3	25.0%
	30~39歳	2	16.7%		5~9年	1	8.3%
	40~49歳	2	16.7%		10~19年	1	8.3%
	50~59歳	3	25.0%		20~29年	1	8.3%
	60~64歳	0	0.0%		30~39年	1	8.3%
	65~69歳	1	8.3%		40年以上	1	8.3%
	70~79歳	2	16.7%		無回答	4	33.3%
	80歳以上	1	8.3%		1人	3	25.0%
性別	男性	6	50.0%	家族人数	2人	5	41.7%
	女性	6	50.0%		3人	1	8.3%
職業	会社員	3	25.0%		4人	1	8.3%
	公務員	1	8.3%		無回答	2	16.7%
	自営業	1	8.3%	単身	3	25.0%	
	無職	0	0.0%	夫婦+子	2	16.7%	
	主婦	2	16.7%	夫婦のみ	3	25.0%	
	パート・アルバイト	2	16.7%	その他	1	8.3%	
	その他	2	16.7%	無回答	3	25.0%	
	無回答	1	8.3%	計	12	100%	

3名(25.0%)、「無回答」が1名(8.3%)であり、「参加している」が最も多かった(図4)。今後の地域活動への参加意向については、「主なメンバーとして企画や運営に携わっている」が1名(8.3%)、「参加したい」が9名(75.0%)、「参加したくない」が1名(8.3%)、「無回答」が1名(8.3%)で、「参加したい」が最も多かった(図5)。参加状況と参加意向を合わせてみると、これまで「参加したことがない」と回答した2名が、今後「参加したい」と回答している。

5-3. ワークショップへの参加

ワークショップへの参加理由としては、「友人と一緒に参加したので楽しみにしてきた」、「いろんな経験をしてきたかったため」、「どんな感じか分からずとりあえずやってみた」、「知人に情報を聞き、面白そうだったから」等の意見が挙げられた(表3)。ワークショップの満足度については、「非常に満足」が3名(25.0%)、「満足」が8名(66.7%)、「どちらともいえない」が1名(8.3%)でほとんどの参加者が満足している(図6)。

他の団地居住者と話す機会があったかについては、「あった」が4名(33.3%)、「少しあった」が6名(50.0%)、「ほとんどなかった」が1名(8%)、「無回答」が1名(8%)であり、少しでも話す機会があった参加者が全体の8割を占めた(図7)。また、他の団地居住者と共同作業をする機会があったかについては、「あった」が2名(16.7%)、「少しあった」が2名(16.7%)、「ほとんどなかった」が3名(25.0%)、「全くなかった」が4名(33.3%)、「無回答」が1名(8.3%)であった(図8)。さらに、新しく他の居住者と知り合う機会があったかについては、「あった」が1名(8.3%)、「少しあった」が6名(50.0%)、「ほとんどなかった」が2名(16.7%)、「全くなかった」が2名(16.7%)、「無回答」が1名(8%)であった(図9)。

今後このようなワークショップに参加したいかについては、「参加したい」が7名(58.3%)、「どちらかとい

えば参加したい」が4名(33.3%)、「分からない」が1名(8.3%)であり、今後も参加したい意向の参加者が多かった(図10)。「参加したい」あるいは「どちらか」というと「参加したい」と回答した人の理由としては、「色々な人と交流できたから」が5名、「ものづくりなどの普段できないことができたから」が3名、「楽しかったから」が2名であった(表4)。

ワークショップに参加して気づいたことや感想(自由記述式)については、「若者の参加への肯定的な意見」

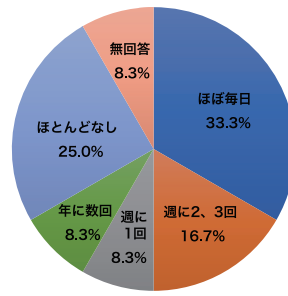


図3 交流頻度

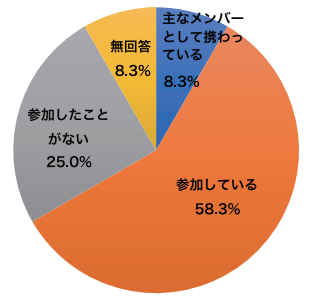


図4 地域活動参加状況

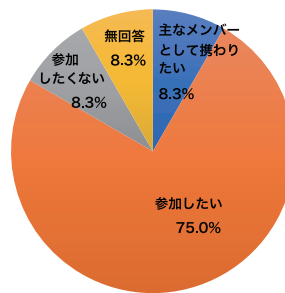


図5 地域活動参加意向

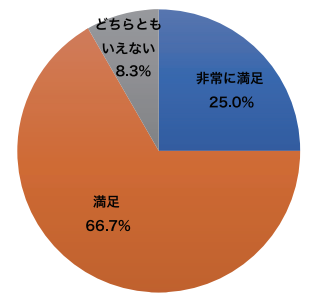


図6 満足度

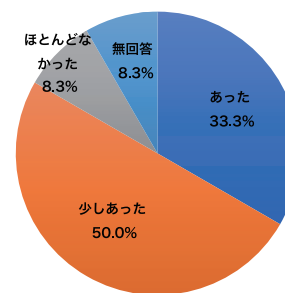


図7 話す機会

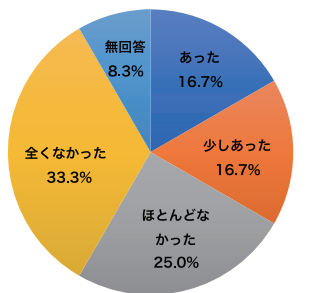


図8 共同作業をする機会

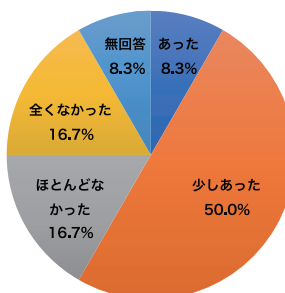


図9 知り合う機会

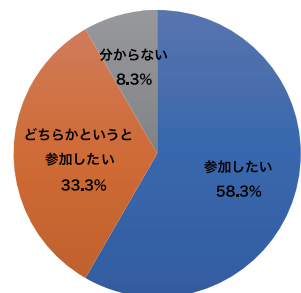


図10 今後の参加意向

表3 ワークショップへの参加理由

ワークショップへの参加理由	
友人と一緒に参加したので楽しみにしてきた	
企画者誘われて	
出店されている方の野菜を購入するため	
いろんな経験をしてきたかったため	
どんな感じか分からずとりあえずやってみた	
自治会長として心配した部分があるため。体調不良でお手伝いが出来なかったため。	
箱がほしかったので	
FBでの情報	
知人に情報を聞き、面白そうだったから	

表4 今後の参加意向の理由

今後の参加	理由	n
「参加したい」または「どちらかというに参加したい」	様々な人との出会いや交流	5
	ものづくりなどの普段できないことができたから	3
	楽しかった	3
	近くでの開催が嬉しい	1
「分からない」	あげほの団地に合った内容が良い	1

表 5 気づいたことや感想

気づいたことや感想	n
若者の参加への肯定的な意見	3
ものづくりが楽しい	3
ワークショップの改善点	3
今後の継続に対する期待	2
その他	1

が 3 名、「ものづくりの楽しさについて」が 3 名、「今後の継続に対する期待」が 2 名、「ワークショップの改善点」が 3 名であった(表 5)。

改善点としては、「椅子などに座りながらできれば良かった」、「イベント内容をもっと検討するべき」、「告知方法を工夫するべき」という意見が見られた。

6. 考察

6-1. 多様な参加者を許容するプログラムの可能性

2 日間で参加者は 16 名であり、「あけぼのテラス」全体の参加者が 109 名であるため、来場者の約 15% がワークショップに参加したことになる。これは決して多くはないが、参加属性を見ると年代、性別、職業ともに大きな偏りがなく、多様な参加者がいたことが分かる。参加理由としては、「いろんな経験をしてみたかった」「面白そうだったから」のような内容に関心を持って参加した人も見られ、年代、性別、職業に関わらず内容に関心があるかないかで参加を決定していることが分かる。このことより、本ワークショップが属性に関わらず多様な人が参加できる可能性のあるプログラムであることがいえる。また、団地居住年数については「無回答」が 4 名であったが、これは団地外の参加者の可能性がある。

6-2. 新たな層の参加を促すプログラムの可能性

回答者の団地住民との交流頻度については、「ほぼ毎日」と「週に 2、3 回」を合わせると 6 名、「ほとんどなし」が 3 名であり、交流頻度が高い人と低い人とに二分したことが分かる。また、地域活動については普段から比較的参加している人が多かったが、参加したことがない人も 3 名参加し、そのうち 2 名は今後参加したいと考えている。以上より、普段団地居住者と交流がない人や、地域活動に参加していない人がワークショップに参加しているため、本ワークショップがこれまでに参加していなかった層の参加を促せる可能性のあるプログラムであると考えられる。

6-3. 交流とものづくりができる点が高く評価

回答者のうち、ワークショップに「非常に満足」、「満足」と回答したのは 92% で、満足度は全体的に高かった。また、今後もワークショップに参加したいかについては、「参加したい」、「どちらかといえば参加したい」を合わせると 92% である。満足度の「どちらともいえない」の回答者と、今後の参加意向の「分からない」の回答者は同じであることから、満足度がそのまま次の参加意向につながっている。参加意向の理由としては、他の住民との交流や、ものづくりの楽しさを挙げている回答者が多く、さらに感想でも若者との交流や、ものづくりの楽しさが挙げられている。以上から、今回のワー

クショップは、交流やものづくりの楽しさを体験できる点が評価され、そのことが満足度や次回への参加意向につながっていると考えられる。

ただし、「椅子などに座りながらできれば良かった」等のいくつかの改善点も指摘され、今後高齢者も含めた多様な方が参加しやすい実施方法の検討が必要である。さらに、「イベント内容をもっと検討するべき」という否定的な意見も見られた。これはすべての人に必ずしも受け入れられるプログラムではなかったことを示している。

6-4. ワークショップが新たな出会いの場となる可能性

ワークショップにおける他の団地居住者との交流について検討する。他の団地居住者と話す機会については、「あった」、「少しあった」を合わせると 83% で、多くの方がワークショップ中に他の参加者と話す機会があったことが分かる。しかし、他の居住者と共同作業をする機会があったかについては、「ほとんどなかった」「全くなかった」を合わせると 58% であり、必ずしも共同作業をする機会があるわけではなく、同じ空間で制作作業をすることで話す機会が生まれたと推察できる。また、新しく他の居住者と知り合う機会があったかどうかについては、「あった」、「少しあった」を合わせると 58% であり、これまで関わりのなかった団地居住者との新たな出会いの場となったことが分かる。以上より、同じ空間を共有してものづくりを体験することで、他の団地居住者との接点生まれ、新たな出会いの場となる可能性が示された。これは、ものづくりがある一定の時間を要するプログラムであり、かつ身体性を伴うものであることから他者との会話が生まれやすいと推察される。

7. まとめ

本研究では、ものづくりが団地居住者のコミュニティ形成に有効なプログラムとなり得るという仮説のもと、その基礎研究として、団地においてもものづくりを誰もが参加可能なワークショップ形式で実施することで、コミュニティ形成にどのような影響を与えるか、その可能性をアンケート調査を用いて検討した。その結果、①今回実施したワークショップが属性に関わらず多様な参加者を許容し、また②これまでに積極的に地域活動等に参加してこなかった新たな層の参加を促すプログラムの可能性のあることを明らかにした。加えて、③今回のワークショップは交流とものづくりができる点が高く評価された。さらに、④ワークショップが新たな出会いの場となる可能性も明らかにした。以上より、ものづくりが団地居住者のコミュニティ形成に有効なプログラムとなり得る可能性を示すことができたと考えられる。

参考文献

- 1) 蘆谷祐介, 山田信博: 高経年団地における居住者の地域活動への参加特性-公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究 その 2, 日本建築学会学術講演梗概集 2018, pp.1381-1382

* 富山大学芸術文化学部 講師・修士 (デザイン学)

** 札幌市立大学デザイン学部 准教授・博士 (学術)

*** Commons fun 代表・博士 (デザイン学)

*Senior Assist. Prof., Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama, M. design

**Associate Prof., School of Design, Sapporo City Univ., Ph.D.

***President, Commons fun, Ph.D. in Design